

II 評論と書評

茅原華山を笑う

茅原華山氏は、二月五日発行『第三帝国』誌上において、その「農村革命論を読む」の最後の一項「社会主義に対する杞憂」の中に、次のごとき名論を公けにした。

「由来サンジカリズムとかソシアリズムとかいうは全然外国的である。日本において社会主義の発生を恐れたり、無政府党の発生を恐れたり、同盟罷工を恐れたり、総同盟罷工を恐れたりするのは、他人の疝氣を頭痛に病むものだ。なるほど日本にも同盟罷工があったには相違ないが、その同盟罷工たるや、西洋の意味はまったくこれなしと謂わねばならない。一時の発作である。決してその労働者としての利害を自覚し、労働階級の共通利害を自覚し、さらに自己の地位を不断に向上させようとする積極的要求から来たものではない。故に名はストライキだが、日本と西洋とはその内容がまるで異なっている」。

「私がかつて日本には社会主義者もサンジカリストもないと書いたら、大杉栄氏がサンジカ

リストはここに在ると言われたそうだが、そういう意味ならば、日本にはトルストイもあればニーチェもある。カーペンターもあればベルグソンもある。あるいはその本国よりも日本の方が多数であるかも知れないが、日本に自発した社会主義、サンジカリズムは断じてない、決してない。いかに自称社会主義者、サンジカリストがその福音を宣伝しても、日本が欧化せざる限り、せっかくの福音も一年草になるとも宿根草にはならない。」

「あるいは言わん。日本もついにはヨーロッパのようになろうと。これははなはだ漠然たる想像であつてかりに肉体から言つても、米の飯はどうてい廃せられない、刺身も廃せられない、漬物も廃せられない。西洋料理にも米がなければ満足されない国民は、絶対にその食物において西洋化する能わざるが事実だとすれば、いかにわが国民の境遇が変化すればとて全然その精神生活が欧化し得るものぞ。」

僕は茅原氏の名論を傷つけないために、ほとんどその全文をここに掲げた。実を言えば、「大名論」とでも題して、ただこれだけの抜書をして置く方が、読者諸君のお慰みになるだらうけれど、またそうする方が礼にかなうとも思ったのだけれど、茅原氏の名誉のために、まげて少々文句をつけて見ることにする。

今茅原氏のこの議論を詮じつめて見れば、社会主義やサンジカリズムは全然欧化しない限りこれらの主義は日本に起り得べきものでない、しかるに日本はどうてい欧化し得ないものであ

る、ということに帰着するらしい。

まず誰にでもすぐ目につくのは、この三項の内容が、およびその連絡が、事実上にもまた論理上にもはなはだ曖昧糲糊なことである。外国的および欧化という言葉がほとんど説明されていない。強いて説明してあるといえ、前者については自覚の有無云々である。後者については米の飯刺身漬物等の食物の執着云々である。そこで強いてその間の連絡をつけて見ると、絶対にその「食物において西洋化する能わざるが事実だとすれば、いかにわが国民の境遇が変化すればとて全然其の精神生活が欧化し得る」筈はない、したがって日本人はどうていその境遇を自覚し得ないということにでもなる。さらに語を変えて言えば、西洋料理を食う西洋人はその境遇を自覚し得るが、日本料理を食う日本人にはどうていそれができない、ということになる。すなわちまず茅原氏自身はどうていその境遇を自覚し得ない獣物だということになる。

しかし茅原氏自身の言葉に即し過ぎると、こう言つたような事実に反するらしい、あまりにお気の毒な結論に到着するのでこんどは少し論法を変えて行こう。

茅原氏は、先きに引用した文章の第一項と第二項との間に、なお次のごとく言っている。

「先日ある人が私に社会問題、労働問題について意見を聴きたいと言つて来た。私は西洋の社会問題、労働問題ならお話ししようが、日本には社会問題、労働問題がないから意見の立て

ようもないと答えた。日本の労働者には貯金でもせよ、文字を習え、清潔にせよと教えるくらいが関の山で、これは何も労働問題ではない。

よしんば労働問題を生ずるだけの事実があったとするも、事実があるというのは、問題があるというのと、截然別物だ。事実を把持してこれを問題とするは、人間の自覚を待たねばならない。いわんや私の見るところでは、日本ではその労働者の生活、その資本家と労働者との関係がいわゆる労働問題を生じ社会問題を生ずるまでに至っているかさえ、十分に調査しなければ決し兼ねるにおいてをや。」

ここに至って、氏のいわゆる外国的という言葉の意味が、やや明確に分って来た。すなわち社会主義やサンジカリズムを生ぜしめる事実は資本家と労働者との関係であって、日本におけるその関係は未だ労働問題および社会問題を生ぜしめるまでに至らず、よしそこまで行っているとするも日本の労働者はその事実を把持してそれを問題にするだけの自覚をもたないというにある。

そこで問題は三つになる、すなわち第一に日本の事実がはたして労働問題または社会問題を生ぜしめるまでに至っていないかの問題である。第二に、もしそこまで進んでいないとすれば、将来に、少なくとも近き将来にどこまで進むかの問題である。もしこの二つの問題が否定

されれば、次に言う第三の問題は自然消滅する。けれどもそのいずれかが肯定されるとなると、日本の労働者はその事実をすでに自覚し得たかまた将来において自覚し得るだろうかの、すなわち最後の問題が起って来る。

茅原氏はこの第一の問題に対して、「十分に調査しなければ決し兼ねる」と言っている。しかし氏が腹の中では否定していることは明らかに見える。一体茅原氏は十年も十五年も新聞記者をやっているがこれくらいのことになお「十分に調査しなければ」などと逃げを張るほどの卑怯者でもまたボンクラ者でもない筈である。されば茅原氏は、今日の日本の社会組織の中に経済組織の中に、まだ資本家と労働者との闘争を惹起すほどの事実を大体において認めていない人だと言える。なお第二の問題については、氏が一言も言っていないことを記憶して置いて貰いたい。

そこで再び先きに引用した第一項に帰る。茅原氏は同盟罷工が日本に起ったことを御存じである。しからばこの同盟罷工が起ったということと、労働問題または社会問題を生ぜしめる事実の有無ということとの間には、いかなる関係があるか。この後者の事実を否定する茅原氏にとっては、それと前者との間に何等の関係も認めないのが当然である。しかるに先きの第一項を見れば茅原氏は、少なくとも暗にその関係を認めている。もしまったく認めないとすれば、そこに余計な同盟罷工のことなどを書く必要がない。かくして茅原氏は、一度否定したこと

を、さらに肯定したのだ。すなわち日本に同盟罷工の起ったことをもって、日本に社会問題または労働問題を生ぜしむべき事実のあることを認めたのだ。有即無、無即有、この活殺自在が茅原氏得意の論法であることは、氏の文章を常に愛読する何人も、讀嘆措く能わざるところである。

茅原氏のこの活殺自在は、先きに死んだ筈の第三の問題を、幸いにも生かしてくれた。そして問題は氏のこの議論の中心生命とも見らるべき自覚云々にはいる。

先きにも言ったごとく、茅原氏は日本人自覚不能論者である。したがって日本の労働者が、「労働者として利害を自覚し、また労働階級の共通利害を自覚し、さらに自己の地位を不断に向上させようとする積極的要求」のないことを断定している。日本の労働者の同盟罷工は、これらの自覚と要求とのない、すなわちまったく西洋のその意味のない、ホンの一時の発作に過ぎない。

僕自身も、日本の労働者のほとんど全部が無自覚なことについては、茅原氏に同意するのみならず、恐らくは茅原氏よりも、僕の方がこれにはより多く痛感している筈である。けれども僕は日本人自覚不能論者ではない。現に事実として僕は僕の近い周囲に、少数ながらも自覚せる労働者の友人をもっている。僕自身も僕の境遇に自覚している一人であることは、遠慮なく

自負し得る。

茅原氏によれば、それらの友人および僕は、絶対にその食物において西洋化する能わざるが故に、いかに僕等の境遇が変化すればとて、全然その精神生活が欧化し得るものではない。けれども僕等は、僕等がヨーロッパ人とほとんど同様に僕等の境遇を自覚し、また僕等の地位を不断に向上させようとする積極的要求をもっていることを、僕等の動かすべからざる事実としてあえて茅原氏に声明する。日本における資本家制度の発達は、西洋のそれに比してなおはなはだ幼稚であるの言うまでもないが、今日のその程度のすでに堪え難きことに、なお明日に至ってはますます堪え難くなるべきことにまったく無感覚でいるほどの、しかく僕等は動物ではないことを、あえて茅原氏に声明する。

けれども茅原氏は、少なくとも僕一人をば、単なる西洋生活のかつ西洋思想の翻訳家に過ぎないものと断定した。恐らくは氏はなお、僕の友人のすべてをも、そう断定することであろう。

しからば日本人は、さらに将来においても、ついにその境遇を自覚し得ないものであろうか。茅原氏によれば、どうもこれは絶望的のものらしい。そして日本人は、もとより茅原氏をも含む、すべて人間ではなく本当の動物だということに帰するらしい。

けれども茅原氏が「いかにわが国の境遇が変化すればとて、全然その精神生活が欧化し得る

ものぞ」と言ったのは、それをきわめて善意に、かつこの句の前後の関係を考えずに、すなわち勝手に解釈すれば、日本に起るべき社会問題または労働問題は西洋のそれとよほど違ったものでなければならぬ、ということの前提であるらしくも思われる。またそうした方が、茅原氏の名譽のためにも、大ぶお得らしい。はたしてしからば、日本の社会問題と西洋のそれとはいかに違わねばならぬものか。これは後学のために、是非とも御教示を願いたいものである。

再び茅原華山を笑う

一

ことしの三月、僕は『時事新報』の紙面を借りて四日間茅原華山を笑ったことがあった。話の順序として、まずその時の事情を少しく述べて置きたい。

その前月、華山は『第三帝国』中の「社会主義に対する杞憂」と題する一項によって、社会主義やサンジカリズムは全然外国的のものである、故に日本が全然欧化せざる限りこれらの主義は日本に起り得べきでない、しかるに日本はどうてい欧化し得ざるものであるという意味のことを発表した。で僕は、そのほとんど全文を掲げて、完膚なきまでに内容批評を試みつつ、散々にその曖昧と矛盾と無知とを笑ったのであった。けれども、それだけでは少々お気の毒にも感ぜられたので、最後に多少の花を持たせて、次のごとく結論して置いた。

「けれども茅原氏のこの文章は、それをきわめて善意に、かつその前後の関係を考えずに、すなわち勝手に解釈すれば、日本に起るべき社会問題または労働問題は、西洋のそれとよほど

違ったものでなければならぬ、ということの前提であるらしくも思われる。またそうした方が、茅原氏の名譽のためにも、大ぶお得らしい。はたしてしからば、日本の社会問題と西洋のそれとはいかに違わねばならぬものか、これは後学のために、是非とも御教示を願いたいものである」と。

華山もまた、『時事新報』紙上「大杉栄先生に謝し奉る」と題して、僕のこの嘲笑に応じた。そしてその名譽のために彼に取ってお得な、僕の善意の解釈を何のことわりもなく臆面もなく採用して、次のごとく答えた。

「私には自分で製造した子でも、どんな子が産れて来るか、男か女かさえ解らない。そんな予言をせよと言うのは、それは大杉さん、無理難題というものなんです。しからば私の意見はどうかというに、私は日本には労働者の自覚がない、不断に向上せんとする積極的要求がないと信ずるのであるから、したがって日本には西洋の意味の社会問題も労働問題もないと信ずるのだ。未だ処女である娘を捉えて、彼女は今にどんな子を産むであろうと問われても、これは禿をかけた無理難題というものではありませんまいか。」

しかしかくは巧みに遁げを張ったものの、彼にもまた、彼独得の、ぼんやりながらの意見があったのだ。彼はそれを希望の形式の下に、さらに附加えて言っている。

「とにかく私は、日本における資本家と労働者との関係を、西洋のように全然人情を無視

し、資本家はただ少しの労銀を払うて多くの時間労働せしめ、労働者はただ多くの労銀を得て少しの時間労働せんとして、ただ葛藤、ただ軋轢をしてそこに調和と配合とのないものにするのは否やだ。私は日本の生活を感情と打算とを織り交ぜた第三式にしたい。旧東洋の感情を主とする生活と旧西洋の打算主義を打って一丸とした生活としたい。」

二

しかるに茅原氏は、最近に至って、この希望を日本の現実の中に見出した。すなわち彼は、鈴木恒三郎氏著『労働問題と温情主義』（温情主義の実験とその反響）をもって、「日本人の生活主義と産業との関係を闡明している点において得易からざる否な最初の著書である」と見做し、「その中には日本の将来に來たるべき無数の新労働問題が提供されている」ことを発見した。そして先きには、「無理難題」であった筈の、日本労働運動の将来を予言して「相諾おす心、新労働運動」（『第三帝国』八月上旬号所載）を提唱するまでに至った。僕が再び笑って見たいのは、この「相諾おす心、新労働運動」である。

華山は、若い時から漢詩をひねくり廻した癖が骨髓にまで浸みこんでいるところから、万事を対句で押し通そうとする。西洋対東洋、物質対精神、争闘対調和。「新労働運動」の根本思想も、要するにここにある。彼はこの対句の各々を無暗に誇張するとともに、それを「即」の

字で結びつけて、その結びつけたものに「第三」もしくは「新」の形容詞を冠せる。これが彼の議論の、その主旨こそは昨日と今日と、今日と明日と、ほとんど毎日のように猫の目のごとく変わり変って行くのにもかかわらず、対手変れど主は変らず的に運んで行く方法である。そしてこれがまた、彼のいつもの、いかさまとこけおどしとの慣用手段である。

もっとも僕は、ヘーゲル流のこの正反合的弁証法 (Thesis, Antithesis, Synthesis) を、絶対に非難するのではない。それがさらに進んで、タルドの反覆対立適応的弁証法 (Répétition, Opposition, Adaptation) にまで行けば、かえって深い興味すらも持てる。けれども華山のこの反覆対立適応たる、幼稚な時代もしくは幼稚な思索家には免れ得ない、あまりに大ざっぱな、漠然とした、したがって虚偽の、材料と命題とに充ち満ちている。

こう言っただけでは、読者に対してもまた華山に対してもはなはだ不親切な処置ではあろうけれど、しかし僕は今一々それを指摘するほどの閑日月を持っていない、それに彼は、この頃大ぶ論調が変わってそのお得意の「即」すなわち適応的弁証法方面の影をひそませて、ただ反覆と対立との二弁証方面のみを榮えさせている。現にこの「新労働運動」においても、先きに言った彼の希望である「日本の生活を感情と打算とを織り交ぜた第三式にしたい。旧東洋の感情を主とする生活と旧西洋の打算主義を打って一丸とした生活としたい」というのが、こんどは日本と西洋とにおける反覆事実である前者のいわゆる感情生活と後者のいわゆる打算生活とを対

立させて、それを打って一丸とする適応事実にも少しも及んでいない。ただ日本における反覆事実を基礎としてその上に築かるべきいわゆる新労働運動を説いているに過ぎない。すなわち彼のいわゆる「新」は、先きには適応事実を指したものであったが、こんどは単に反覆事実の拡張もしくは充実を示すものとなった。

しからば華山は、日本と西洋との反覆事実を、およびその相互の対立事実を、いかに観ているか、またそれがいかに大ざっぱな、漠然とした、そして虚偽の材料と命題とに充ち満ちているか。

三

華山の言うところによれば、

由来、欧州文明の依つて来るところは、民族の争闘自然の圧迫等による、泥棒民族の大集団から生れて来たもので、産業革命の由来するところも、またこの争闘文明の進展した結果に外ならない。彼等の産業精神は、すべて心に非ず、愛情に非ず、物にあり、争闘にある。

また華山の言うところによれば、

欧州では掠奪階級と被掠奪階級とが常に争闘している。必死となってその権利と利益とを主張している。したがって相互の掠奪的欲望は間断なく、鍛錬せられて行く。資本家は常にいか

にして労働者を多く労働せしめいかにして賃金を安くせしめようかということを考える。労働者はまた、いかにして少なく労働し、いかにして多く賃金を得ようかということを考える。彼等は相互交々に利を争っている。彼等は物質の重荷の下に跼蹐として、その心は日一日と冷酷になって行く。

これが華山のいわゆる西洋における反覆事実である。西洋人は掠奪根性泥棒根性の権化である。彼等は人情の暖味を知らないで、ただ打算をのみ事とする、唾棄し果すべき人間どもである。しからばわれわれ日本人は如何。

華山の言うところによれば、

日本の産業界に忘れてならないものは抱合的精神である。相寄りて相互の生存を安全にせんとする心である。すなわち自他両存がわが生活主義の根柢である。欧州では労働問題と言えただだちに資本家の横暴と圧迫とを考える。しかるに日本では、きわめて人間的な関係をもつて、主と従との関係が、習慣的にも経済的にも成立していた。

また華山の言うところによれば、

この自他両存の生活主義は、日本国民の特殊的発達に起因するもので、日本人相互の内部的結合がきわめて人間的であることから生ずるのである。すなわち日本国民のこの抱合的精神は、東洋主義の美点をもっとも現実的に表現しているものであって、これは日本国民の深い生

活の基調から出発しているものである。

これが華山のいわゆる日本における反覆事実である。日本人は抱合的精神共存の精神の権化である。彼等は卑しむべき打算を棄てて、ただ人情の暖味に生きる、あな美わしの人間様どもである。

さらに華山の言うところによれば、

故に日本の労働問題を解決するには、欧州問題をそのまま持って来るのでは駄目だ。日本の産業心裡は、まず日本のこの生活主義の心裡から、その根柢を見出されなければならない。日本人の生活基調から解釈して行つて、初めて日本人の産業心裡が解決されるのである。かくして労働問題も初めて容易に解決されるのである。

かくのごとくして華山は、日本と西洋との反覆事実を対立させ、その各々の事実の上に立つまたは立つべき労働問題の差異を論じているのであるが、要するに彼は、日本におけるその将来が資本と労働との調和でなければならぬことを暗示したのみで、ついに何等そのいわゆる新労働運動の具体的説明にはいっていない。ここに、先きに言った彼の慣用手段たる「新」の字の例のこけおどしが、明らかに暴露されている。

そこに次には、この二つのいわゆる反覆もしくは対立事実の、いかにいかさまであるかの解剖に取掛る。

まず、西洋人ははたして人情を撥撫して打算にのみ耽る、掠奪的、泥棒人間であろうか。次に、日本ははたして打算を顧みないで人情にのみよる抱合的、共存的人間であろうか。またそういうのが、はたしてこの各々の国民の特殊の生活基調であろうか。

華山は、先きにも言ったごとく、いわゆる自他両存の抱合的精神をもって、日本国民独得のものと思ひ、その特殊の発達すなわち相互の内部的結合がきわめて人間的であることから生じた、その深い生活基調であると断定している。そして華山はなお付け加えて言う。日本国民は現在まで種々な歴史的過程を経過して来たのであるが、この日本国民相互の内部的結合というものは失われることがなかった。そこに日本人の深い抱合的精神の成長があったのであると。

そこで僕は彼華山に、少しく教えて置かなければならぬことがある。それは最近の『第三帝国』に寄せた「僕の社会観」（編者註・『史的社會観』『僕の現代社會』の中にも説き、また本月号の『新小説』にも「相互扶助論」（編者註・『動物界の相互扶助』と題してさらに詳細に説いてあることだが、かのいわゆる共存的精神は、少なくとも動物界には、同一種の各個体の間には、ほとんど普遍の生活基調となっている。また人類社会においても、ある事情のためにこの精神の発達が著しく

妨げられてはいるものの、同一種族内の各個人の間には、等しくなお生活基調として保存されている。もっとも一たび同一種もしくは同一種族の範囲を超えれば、動物も人間もとかくに掠奪的精神に駆られてしまう。

もう少し詳しく言えば、単に衣食住を得たいがために同種の各個体が相争闘するということは、すなわちいわゆる生存競争なるものは、決して生物界の普遍の原則ではない。かえって事實は、この争闘の激烈なところに退歩と衰滅とを示し、この争闘の取除かれたところに進歩と繁栄とを示している。いやしくも動物の各階級において、進歩の先登に立っている種族は、ことごとく争闘を避けて協同に従っている。そしてこの協同は、すべての動物界の進化の先登に立っている人類が、原始以来常に実行し来たったところである。そしてこれは、人類がいかにして今日の地位に達することができたかという疑問に対する、ほとんど唯一の答案である。

けれども人類の協同は、一面にはなほだしく完成されつつあると同時に、他面にまたはなほだしき障碍をもたらしつつある。すなわち人類は、すでにその原始時代において、あるいは暴力によりあるいは詐欺的手段によって、他の生物界には見ることできない、同類が同類を利用することを知った。利用者は同類の協力がもたらすほとんどあらゆる利益を壟断した。その結果は貧富の懸絶である。階級の乖離である。かくして利用者と利用者との間の大きな利益の奪合いが起る。被利用者と被利用者との間の小なる利益の奪合いが起る。利用者と被利用者との

の間の大小の利益の奪合いが起る。

華山はこれらの事実にまったく無知であったのだ。そして単に日本と西洋との現在をしかもその表面だけを見て、ただちに西洋人は掠奪人種、日本人は温情人種と早飲み込みに極めてしまったのだ。

少しは日本の歴史を顧みるが善い。この日本がともかくも一国として成立するまでは、華山のいわゆる西洋の反覆事実である民族の争闘、泥棒民族の掠奪がほとんどいたるところに見出されるではないか。そしてその間も、またその後も、階級または民族の争闘、泥棒階級や泥棒民族の掠奪が、ほとんどいたるところに見出されるではないか。

五

しかしそんな古い歴史はどうでも善いとして、一足飛びに現代の日本と西洋との比較に移ろう。さすがに華山でも、筆さきだけでは、多少の分ったことを言う時もある。彼は「新労働運動」の冒頭に言う。日本文明の現在において注目すべき事実は、時とともに革進せられて行く産業の前途である。すなわち日本の産業文明は現在いかなる過程にあり、いかなる事実とともにいかなる進歩をなしつつあるか、またいかなる過程によっていかなる方面に進行しいかなる方向を選んで行くか。これは実際上においてもまた理論上においても、解決せられ批判されな

ければならない問題であると。

しかるにこの問題に対する彼の答は、単に日本の産業界はある点から見れば進展の気運にあるものと見られるけれど、ある点から見れば分裂渾沌の過程を示しているとも見られる、と言っているに過ぎない。そして彼は、この曖昧糺糊たる経済学的知識をもって、日本と西洋との比較を試みようとしたのだ。

「われわれ日本人は、欧州人が産業革命をしたから、是非とも欧州人のごとく産業革命をしなければならぬ、と言うべきものではない」と彼は言う。果然彼は産業革命という術語の意味すらも知らないのだ。産業革命というのは、一言に言えば、機械の発明が生産の上に及ぼした大変革を指すのだ。われわれ日本人も欧州人を真似て、この産業革命をしなければならぬの、してはいけないのという問題が今どこにあるのだ。すでにわれわれ日本人は、二十七、八年の役前後において、この大変革の初期を遂げているのだ。なお華山はそれに続いて「われわれは欧州の進歩したる産業、すなわち機械の発達とか、科学的精神とかいうものを、われわれの産業の材料として滋味として学ぶべきものである」と言っているが、これがすなわち産業革命を導いたことになったのだ。そしてこの産業革命の結果として、初めてこの日本にも近代の意味で言う、すなわち新しい形式の資本家階級と労働者階級とが完成されたのだ。同類が同類を利用する、しかもきわめて大仕掛に利用する新しい形式の制度が完成されたのだ。したがっ

てこの二階級の対立から生ずる社会問題、労働問題が起きたのだ。日本の労働運動が労働者の労働運動がともかくも一時に勃興したのは実にこの時代である。

「日本の労働者には、労働者としての利害を自覚した労働階級の共通利害を自覚しさらに自己の地位を不断に向上させようとする積極的要求がない。故に彼等の同盟罷工は、単なる一時の発作で名は同盟罷工でも西洋のそれとはまるでその内容が違う」などとぬかした華山は、少しく当時およびその後の労働運動史を見るが善い。

一たび産業革命の洗礼を受け、その結果として大仕掛に同類の利用を始めた日本は、その先進者たる欧州と、この点において本質的に何等の異なるところもない。ただその順序と程度とにおいて、多少の前後と高低とがあるに過ぎない。そして欧州人がその同類の利用から受ける社会的および個人的影響は、等しくまた日本人もその利用の程度に応じて不可抗的に受けなければならぬ。

同類が同類を利用する間、すなわちこの社会に征服の事実の存在する間、人類同士の争闘は止む時がないのみならず、その争闘はますます激烈となる。

人類は最早、この同類の利用から生ずる悖理と損害と悲惨とに堪え得られなくなった。今や人類は断じてこの同類の掠奪を絶滅するの必要に迫られて来た。人類はまず、その生活の基礎たる経済界においてまったくこの同類の利用を絶滅して、真に自由合意より成る相互扶助もし

くは協同の大義につかなければならぬ。労働者は、永久に彼等を利用せんとする資本家と力争して、真に人間らしい生活を贏ち得なければならぬ。そしてこの力争が真の労働運動であるのだ。

茅原華山論

今になると、あのみじめな末路には、少々可哀相な気もするが、しかしそんな下らない俠氣^{ハクキ}は出さん方がよからう。

実のところ僕は、あんなじゃない、もう二つの末路を予想していたのであった。それは、あの男が盛んに馬鹿を書いて、読者からまったく見はなされてしまうか、それでもその期を待たずに、内輪の連中が同盟して、態よくかあるいは態わるくか、ともかくもあの男を社から逐いはらってしまふかだ。

これとても理由のない予想ではなかった。第一に、あの茅原という男の読者は、しかもその中の多少堅実な（茅原のためにはない）読者は政治的または社会的に少しく目覚めたものの、なおその自分と共鳴する政治論または社会論を見出し得ないところへ、うまくそれに付けこんだあの男の態度に魅せられてしまったのだ。この魅するということ、言葉を換えて

言えば、胡麻化すということ、これがあの男の本当の身上なのだ。子供の時からひねくり廻して来た漢詩、そこから来た文字の豊富、文章の絢爛、若い時からの地方および中央の新聞記者生活、そこから来たジャーナリスチック・キャラクター、人気取りちよこ才。生来のおしゃべり、そこから来たチャッラポコ、大法螺吹き。これらの諸才能が相集まり相俟って、またそれによって無邪気な青年の間に多少の名声と成功とを勝ち得るに従って、いよいよますますその増長を来たして、ついに今日のごとき、あのこけおどしと胡麻化しとの、茅原華山ができたのだ。

雑誌『第三帝国』は民主主義で打って出た。それに多少の社会主義的色彩すら混えられていた。帝国主義と軍国主義との横暴に反動して、また諸種の抽象的新思想の勃興と政治的および社会的の出来事とに刺激されて、何等かの具体化された新思想を渴望していた青年等は、争ってこのいかにも元気のよさそうな『第三帝国』に投じた。『第三帝国』の門出の景気のよさは、あの種類の雑誌としては、実に十数年前の幸徳と堺との『平民新聞』以来のことであった。しかしコケおどしと胡麻化しとの箔は、無邪気とはいふもののなお自分で物事を判断することを始めた青年の目に、ついに剝けざるを得ない。曖昧と矛盾と、およびその中に隠されている不真面目と野心とは、よほどの馬鹿者にでない限り、ついに露われざるを得ない。現に多くの青年の間には、茅原に対するこの幻滅の傾向が、『第三帝国』創刊後半十年ならずして、すでに

大ぶあちこちに萌していた。僕は、この意味の訴えを、ずいぶんと地方の青年から聞かされたのであった。

この傾向は、茅原が『万朝報』を放逐されて、何とかの辞という女郎の泣言めいたものを『第三帝国』に載せ、さらに各地方を遊説して歩いて、うまうま大甘の読者をたらしこんで、し济したりとますます膏に乗りかけている矢さきへ、不意に勃発した四方からの茅原攻撃のために、さらに一時に激成された。そしてこの茅原攻撃の先登は、またその親玉は、実にか言う僕自身であったのだ。

最初僕は、『第三帝国』にもまた茅原にも、少なからぬ厚意を持っていた。それは、彼があの雑誌によって、青年の間に政治的および社会的の漠然ながらも自覚を促進することと思っていたからであった。この期待は確かに欺かれはしなかった。『第三帝国』は、新しい意味での自由民権の、寺小屋ほどの役目は勤めた。けれどもやがて、この寺小屋で教えるいろはのお手本に、妙にまがりくねった文字が現れ出して来た。最初は大ぶ神妙に、あちこちで聞きかじって来た新しものに輪をかけて、しきりに新しく新しくと努力していたのが、だんだん勢とともに凶に乗って来て、ようやくその本音を吐き出して来た。ことに例の模範選挙とやらの大失敗後は、新しものはそっち除けにして、いかにかけて政權に近づかんとするその野心が、事ごとに現れ出して来た。『第三帝国』は、少なくとも茅原の文字によって、『第一帝国』に後戻り

せんとした。軍備拡張結構、専制政治結構、貴族政治結構。何でもかんでも、山県か寺内あたりの喜びそうなことには、すべて結構尽しを並べ立てた。また最初はそうとは明らかに言わないで担き上げていた社会主義的思想に対して、それがそろそろとその野心の邪魔になるに従って、機会あるごとにケチをつけ始めた。

ここに至って僕は彼のこけおどしと胡麻化しとによって害われる無邪気な青年のために悲しみ、また僕自身の主義の汚がされたことを憤って、断然彼を社会的に葬り去るべく決心した。かくして僕が、この三月の『時事新報』に茅原攻撃の口火をきって以来、他にもお尻のむずむずしていた堺利彦、久津見藤村、浅見蛮海、山口孤剣等の諸氏も、処々に蜂起した。そしてわずかに一、二カ月の間に、九千と号していた読者の数が俄然として五千に減った。それがさらに三千となり、一千となり、ついに五百、三百となるのも、決して遠い将来のことではなかったのだ。

現に僕が茅原攻撃を始めた際、『第三帝国』の某社員は、君にやられてはとも社維持ができなくなるから、僕等の米糧を助けると思っで中止してくれ、とまで頼みに来た。そしてその時に初めて僕は、茅原と他のすべての社員との間の、思想と感情とのなはだしき乖離を知ったのであった。

『第三帝国』の創刊の発意者は、哲学院大学出身の二秀才、野村善兵衛、松本悟朗の二人で

あった。学校を出たばかりの、しかも読書にのみ耽っていた篤学な二人は、やはり一般の無邪気な青年とともに、『万朝報』紙上の茅原の論議に魅せられていた。二人は茅原を訪うてその創刊すべき雑誌に助力を乞うた。しかるに当時あたかも茅原の許には、これまたはなはだ無邪気な石田友治の発意の下に同様の計画がもたらされていたところであった。そこで茅原は、ただちにその計画をものにして、一見してはなはだ有望らしい野村、松本の二人をもそこに加えてしまった。なお茅原には、早稲田大学および明治大学の学生某々に、少々の金を与えて恩を施してある、数名の子弟があった。茅原は、それらの某々をも加えて、自ら主盟と称して、かの『第三帝国』を創刊したのであった。

しかるに間もなく、まず野村善兵衛は、その雑誌のあまりの茅原化と、また茅原の実際の人物と思想とに呆れ返って、『第三帝国』を亡命した。その他の諸社員もまた、等しく一方に呆れ返りながらも、なお多少の希望を抱きつつ、ことに雑誌の発展が米櫃のたしになるようになってからは、ともかくも辛抱して働いていた。その多少の希望とは、茅原を彼等の欲する方に導いてその声名と文章と雄弁とを彼等の欲することに利用することであった。

この希望は、彼等の口からもしばしば洩れ、また彼等もその実現にずいぶん骨を折っていた。けれども最初の間こそは常に彼等の言を聴いた茅原も、彼等がその雑誌によって米櫃を得られるとなるとともに、にわかにはその態度を変えて来た。かくして社員同士の間に、あるいは

個人的にあるいは集合的に、主盟放逐の案が持ち上がって来た。茅原恩顧の子分等の間にすらも、彼の議論や行動のますます変てこになるのを見て、かつその「懺悔録」と称する自叙伝すら代筆までも命ぜられるに至って、ひそかに不満の念は湧き上がっていた。

かくして僕の目には、『第三帝国』、もしくはその主盟としての茅原の末路が、すでにあまりに明らかに映っていたのであった。そして僕は、最後の打撃として、彼の人格および思想に対する一大論文を、近く起草する心づもりでいたのであった。

しかるにこの形勢を見てとった茅原は、会計にも編集にも（自分の受取る報酬と自分の書く文章との外には）まったく無関係を装っていた従来の仮面を脱ぎ棄てて、突然石田から会計の権を奪ってそれを自分の細君に握らせ、かつ非茅原派のもっとも露骨なる中村孤月を放逐した。さらに機を見て、すなわち石田が雑誌『女王』を発行せんとするに当って、それを口実として石田にまでも退社を強要せんとするに至った。そして石田は、その持主、発行人、兼編集人たる法律上の権利によって、あべこべに茅原およびその他の社員を一括して逐いはらってしまった。これが今日の出来事の大体の成行である。

茅原は今、郊外に隠棲していっさいの論壇から引退する、と称しているそうである。彼としては、いかにもそう称しそうな、言葉である。しかしこれは、茅原自身のためにも、是非そうした方がお得である。彼のごとき、無学、無恥、無誠意の輩は、いっさいの真面目な事業か

ら、未来永劫に引退してしまいがいい。そして彼は、山懸Ⅱ寺内Ⅱ後藤系の輩下となって、何等学問とか廉恥とか誠意とかの用のない、政権争奪の陰謀にでも加わるがいい。そして政治そのものの醜陋を、彼等自身の行動によって、天下に見せつけてくれるがいい。彼の仕事としては、とにかくに社会的に有益な仕事としてはまずこの辺のところであろう。そしてうまく行ったら、何かの副参政官にでもありつくがいい。しかしここにもまた、ただ一言彼に忠告して置きたいが、そんな夢を見ながら散々こき使われたあとで、またまた逐っぱらわれないようにね、よく気をつけるがいい。それとも、もしそんな形勢が見えたら、例の手で、急いで貯金をふやして置くがいい。

二種の個人的自由

福田博士の新社会論を読む

一

堺利彦氏の『月刊新社会』と同時に、慶応義塾大学教授林毅陸氏の『新社会』が出た。林氏は外交史の専門家であるとともに、政治上には常にイギリス流の民主制を鼓吹している人である。したがってそのいわゆる新社会なるものも、要するにその平素の主張の外には出ない。

しからばこのイギリス流の民主制とはいかなる性質のものかと言うに、「新社会に寄せて真意義の新社会を論ず」という福田徳三氏の一文は、大日本帝国の大学教授としてはあるまじき露骨と大胆とをもって、これに答えている。イギリス流の民主制は、ひとり林氏のみならず、多少進歩せるほとんどあらゆる学者の、そしてまたいわゆる政治的に目覚めた青年の、理想する新社会である。されば今ここに、福田博士の新社会論を紹介敷衍して、彼等のいわゆる新社会の性質を喝破して、真意義の新社会を闡明して置くのも、あながちに無益なことではあるまいと思う。